

RIDING SPORT

[ライディングスポーツ]

2020年12月号 (毎月24日発売) 10月24日発売

2020
12
December
NUMBER
455

RIDERS' SPIRIT FROM MOTORCYCLE SCENES



Impression

ホンダCBR600RR
サーキット試乗
スポーツランドSUGOで
本誌青木がインプレッション

Moto3

小椋 藍ランキングトップ浮上
あとは表彰台の真ん中だけ!

JSB1000

中須賀克行 vs 野左根航汰 オートポリス決戦
壮絶なチームメイト対決の行方

First Victory

岡谷雄太 初優勝
2勝目に期待 ランキング急上昇

MotpGP

混戦が続くMotpGP
Rd. ⑧ エリミア・ロマーニャGP
Rd. ⑨ カタルニアGP / Rd. ⑩ フランスGP

頂上は近い!

特集

中上 貴嗣
TAKAKI NAKAGAMI

Regular Contents

- 20 NTSの挑戦
- 22 レースをおもしろく見るための理論講座
- 26 ザ・スパニッシュ・コーナー 2
◎スペインNo.1ジャーナリストのMotoGP通信
- 28 遠藤智のGPサーカスII
- 30 中野真矢の目
◎ライダー目線でレースを切る
- 32 チュートリアル福ちゃん
「MotoGPサイコー」
- 36 百拳百捷2
◎ブリチストン東雅雄のレーシングレポート
- 39 筑波のひろば

- 40 ニュースパドック
◎最新ニュース ◎インフォメーション ◎新製品情報
- 44 全日本観戦ガイド ◎第5戦鈴鹿
- 45 レースカレンダー
- 46 編集長の取材メモ
- 48 もてぎNAVI
- 49 岡山BOX
- 50 グランドスタンド「読者のページ」
- 53 藤原らんかの4コマ劇場
- 54 医学で勝てるか ◎宇津田 言
- 55 オートボリス情報
- 60 発想力で常識を超えよう ◎ライテック講座

- 62 102 ライディングスポーツ オンラインショップ
- 64 RSカップレポート
- 71 SUGOインフォメーション
- 72 ローカルレースリザルト
- 75 2020ランキング
- 76 コースレコード/走行会情報
- 77 ライディングスポーツ バックナンバー販売
- 79 写真で見る今月のニュース
◎Roadracing monthly view
- 90 津田一磨とベビーフェイスの挑戦
- 94 おんせん県のサーキット情報

- 100 ライダー日記2020
◎中上貴晶
◎長島哲太 ◎鈴木竜生 ◎佐々木歩夢
◎島羽海渡 ◎小椋 藍 ◎園井勇輝
◎山中瑛聖 ◎大久保光 ◎岡谷雄太 ◎浦本修亮
- 103 世界で戦うサムライダー
◎日本人選手が参戦する海外レースレポート
- 104 JP250テント村
- 105 RSカップピックアップ
- 106 NEW PRODUCTS
FOR RACING & SPORTS RIDING
◎レース&スポーツライディング用
パーツ/ギアの新製品紹介とテスト
- 111 読者プレゼント



紙写真/レッドブル

MotoGPクラスにステップアップして3年目の中上貴晶。昨年はシーズン途中で腕の負傷を治すためにつらい日々を送ったこともあった。そして今年。新型コロナウイルス感染拡大の影響でスタートが4カ月も遅れたが、新生中上貴晶は見違えるほどの強さを手に入れている。軽ばない。予選順位よりも前でゴールする。天候に左右されない。第10戦を終えた時点で、すべてのレースでトップ10フィニッシュを達成。いよいよ中上の時代がやってきた。

今季はホンダのエース、マルク・マルケスが早々に負傷して欠場が続いている。その代わりに中上貴晶がホンダを背負って立っている。中上を取り巻くスタッフの数が増え、テレビカメラに追いかけられる回数も増えた。その期待に中上は見事にこたえている。腕の手術でトレーニングもできなかった日々は、中上を衰えさせるどころか、成長させたのだろうか。MotoGPクラスの代表ライダーとして威風堂々と走り続ける。



6 **MotoGP HIGHLIGHT**
世界最高峰クラスで戦う侍
中上貴晶

- ▶ スペシャルインタビュー
表彰台が見えてきた今季の活躍ぶり
- ▶ 遠藤智が現地からスペシャル報告
バイクの感触もすごくいいし、とても楽しい
- ▶ 本誌編集長スペシャルエッセイ
長年取材してきた「天才ライダーの作り方」
中上貴晶はどうやって作られたのか

14 **MotoGPエ・ト・セトラ&リザルト&レポート**
◎第8戦エミリア=ロマーニャ ◎第9戦カタルニア ◎第10戦フランス

34 **EWC HIGHLIGHT**
YARTが最終戦を制し
SERTがタイトル獲得

35 **SSP300 HIGHLIGHT**
岡谷雄太がSSP300日本人初優勝

56 **本誌編集長の**
ホンダCBR600RR
サーキット試乗

◎これまでで最高の中上貴晶

80 **SBKハイライト&リザルト&レポート**
◎第6戦カタルニア ◎第7戦フランス

84 **全日本 HIGHLIGHT**
開幕4連勝の野左根航汰が迎えた試練

88 **全日本&リザルト&レポート**
◎第3戦オートボリス

92 **バイク用メガネのパイオニア** **ダブルオーグラスギアを知る**

108 **チームRSスペシャル**
◎2020もて耐参戦記



世界最高峰クラスで戦う侍

中上貴晶

人気も成績も急上昇中

MotoGP最高峰クラスを戦う唯一の日本人ライダー中上貴晶が今、大輪の花を咲かせようとしている。全日本、GP125、Moto2、MotoGPと王道を歩んできた中上は最高峰クラスで3年目のシーズンを迎えている。昨シーズン終盤戦は負傷した腕の手術を受けるために欠場を決断した。今季は新型コロナウイルス感染拡大の影響でシーズンスタートが大幅に伸びた。かつてないほど長い長いシーズンオフを過ごすことになったことが吉と出たのか。全戦でトップ10フィニッシュを決めて大混戦のタイトル争いにも加わっている中上貴晶に迫る。

自信という目に見えない力が、これほどまでにライダーを変えてしまうのだろうか。まだ表彰台には立っていないが、9戦を終えてトップのファビオ・クアルタロと34点差の5位。いつ表彰台を取ってもおかしくない走りを見せる中上貴晶が、3年目のシーズンにしてタイトル争いに加わっている。今年も新型コロナウイルスの感染拡大で短期決戦となった。3月の開幕戦カタールGPは、3クラスで唯一MotoGPクラスがキャンセルされた。そして7月に再開されたシーズンは、すべてヨーロッパで開催されることになり、11月までの5カ月で14戦というハードスケジュールとなった。同一サーキットでの2連戦が5回。そのうち3連戦が4回。ミスをしないうち3連戦でも同じだが、これは通常のシーズンでも同じだが、短期決戦となった今年は一段と重要なポイントとなった。その中で中上は第3戦アンタルシアGPの4位を最高位に、すべてのレースでトップ10フィニッシュを果たす。上位10位までの選手で、またミスをしていないのは中上だけ。残り5戦。この安定性がチャンピオン争いの大きな武器になりそうだ。

MotoGPクラスの開幕戦となった第2戦スペインGPで中上は、「連戦が続くので、いかに集中を切らさないか。ミスをおかさないかが重要になる」と語っていた。4位になった第3戦アンタルシアGPでは、優勝したクアルタロから約6秒差。赤旗中断にならなければ確実に表彰台に立っていた。第6戦ステイリアGPでは、再開したレースで7位。12周のプリントレースになったこともあるが、優勝のミゲール・オリベイ

ラと1.8秒差。そして第10戦フランスGPでは、優勝したダニロ・ペトルッチと約6秒差の7位だった。今年もライバルの口から中上の名前が頻りに出たようになった。第10戦フランスGPで初表彰台に立ったアレックス・マルケスは、「ナカガミの走り、データを見て学んでいる。今回はナカガミに近い走りができているのでいいレースができる」と語っていたが、決勝では中上に先着して初表彰台の2位。先を越された感はあるが、ケガでマルク・マルケスを欠き、カル・クラッチロウがケガと手術の影響で本調子ではなく、中上に掛けるホンダの期待はレースを追うことに大きくなっていった。

横山健男HRCテクニカルディレクターは、「タカの走り、才能はすばらしい。それはデータにはつきり出ている」と賞賛。マルクの走りやデータを参考に速さに磨きをかけてきた中上が、今度はルーキーのアレックスに生かされることになった。まさに、ホンダのエースとしての働きに評価は高まるばかりである。

「みんなにチャンピオン争いだねって言われるけども、タイトル争いなんて考えたこともないし、まずは表彰台に立ちたい。もう立てる自信もあるし」と、フランスGPを終えて語った。

中上にとって、ヘレス、レッドブルリンク、ミサノ、ル・マンとこれまでは相性のいいサーキットが続いた。終盤戦は決して得意とは言えないアラゴン、バレンシア、そして初開催のポルトガルのポルティマオと続く。中上の成長と強さが試される5レース。この号が出るころには、ある程度、答えは出ているのではないだろうか。

最高峰クラス3年目で大きく開花した才能

表彰台が見えてきた今季の活躍ぶり



バイクのフィーリングもすごくいいし、とても楽しい。今度こそ！

こんなシーズンをだれが予想したことだろう。ケガで欠場が続くデイフェンディングチャンピオンのマルク・マルケスのいないチャンピオンシップは大混戦となっている。第10戦フランスGP（ MotoGPクラスは9戦目）を終えて、7人のウィナーが誕生した。そのウィナーの中に中上貴晶の名前はないが、今季最も注目されている選手である。9戦を終えて4位を最高位に総合5位。中上の好調が話題になった最初のレースが第3戦アンダールシアGPで4位になったときのこと。

このレースで中上は、フリー走行で総合4位。予選は8番手だったが、FP2とFP4で2度のトップタイムをマークした。決勝時

間とほぼ同じ時間帯のセッションを2度も制していたが、その走りを決勝でも再現した。オープニングラップ6番手から後半には4番手へとポジションを上げた。終盤は、2位争いをするマーベリック・ビニャーレスとパレンティーノ・ロッシの二人に肉薄。25週のレースを終えたときには、3位でゴールのロッシと差は、わずか0.5秒。中上にとっては初めて表彰台が現実的になったレースであり、その要因について中上は、「車体のバランスがうまく取れたから」と語った。

その1週間前に同じヘレスで行なわれた第2戦スペインGPは、MotoGPクラスにとってシーズンの開幕戦だった。このレースで中上は、フロントタイヤのオーバーヒートに苦しんで10位に終わる。「トップ10フィニッシュはできたが、自分の走りがまるでできなかった」と悔しそうな表情を見せた。気温は連日35度前後の猛暑。路面温度は50度を超えた。中上は「集団の中で走り過ぎたことが

フロントタイヤのオーバーヒートの原因。スリップを多用したことがフロントタイヤに影響した」と推測。このレースですばらしい走りを見せるも転倒を喫し、右腕上腕を骨折して戦列を去ったマルク・マルケスのデータが、問題解明に向けて大きなヒントになった。

それはマルクのブレーキングにあった。フロントだけではなく、リアブレーキをうまく使い、リアタイヤをスライドさせてコーナーに入る。マルクは二つのタイヤをうまく機能させていた。対照的にフロントブレーキに頼りすぎている中上は、フロントタイヤに掛かる過重が大きい。それが原因でフロントタイヤのオーバーヒートにつながっていることがデータで明らかになったからだ。つまり、マルクと比較すれば、フロントだけの一輪走行であり、これが決定的な違いだった。

このレースを終えた後、中上のコメントが正確に伝わらず、マルクスと同じセッティングにした、と報じられた。体の大きさもライディングスタイルも違う中上が、マルクスと同じにしても意味はなく、正しくは「前後のタイヤをうまく使うという手法を中上スタイルにアジャストした」ことがアンダールシアGPの好走につながった。

中上は中高速コーナーで速い。こうしたコーナーでは、時にはマルクよりも速いといわれ、マルクも参考にするほど。セッティングの傾向としては、車高が高く、ホイールベースの長い「大きいバイク」になるが、ハードブレーキングを必要とする低速コーナーでは止まらない、曲がれないというウィークポイントにつながる。その折衷案がなかなか見つからなかったことがこれまで安定した走りができるという理由の一つだったのだ。その解決策が「マルクのパランスのいい走り」だった。

もちろん、中上の乗る19年型RC213Vが熟成しているバイクだったということも見逃せないが、このレースをきっかけに中上は、どのサーキットでも上位に名前を連ね、トップライダーの仲間入りを果たすことになる。スペインのヘレス、オーストリアのレッドブ

ルリンク、イタリアのミサノ、スペインはバルセロナ、フランスのル・マンと中高速コーナーが多いサーキットが続いたことも中上にとっては追い風となったが、その中でもレッドブルリンクで行なわれた第6戦ステイリアGPで大きなステップを刻むことに成功した。このレースで中上は、キャリア初のフロントロウ獲得となる2番手を走行したが、ビニャー・ミルに続いて2番手を走行したが、ビニャーレースの転倒でレースは赤旗中断となる。中上にとっては、「レースが中断にならなければ優勝もねらえた」という戦いだったが、惜しくも、振り出しに戻ることにした。

再開されたレースでは「みんな新品のタイヤで出て行ったのを見たときに、これは難しいと感じた」と語る。中上には新品のスペアタイヤがなく、大接戦の中で、もう一步の速さがなく7位に終わった。

「レースが終わったときに、本当に腹が立つた怒りがわいてきた。でも、これもレースだと思うようにした。それよりもステイリアGPはやれることはすべてやっつし、満足のいく走りできた。すべてのセッションで5位以内だったし、ウィークを通じて高いパフォーマンスを見せられた。まくれではなく、安定したパフォーマンスを見せられた。チームやHRCに自分の力を証明することができたこともうれしかった」

このレースを境に中上に大きな変化がうまれた。それは、4位になった第3戦アンダールシアで現実的な目標になった表彰台獲得が、第6戦ステイリアでは確信に変わったからだ。

それからの戦いは、タイヤのバックアップを必ず取るようになる。それも影響したのだろう。ミサノの2連戦はフリー、予選がうまくいかず中団からのスタートになる。だが追い上げて9位、6位というシングルフィニッシュを果たす。続くカタリアGPも予選グリッドが悪かったが、追上げて7位。そして第10戦フランスGPも13位というグリッドから7位でフィニッシュとすばらしい追い上げの連続で注目された。これから残り5戦は

予選が一つの課題になるが、それが解消できれば大きなステップを刻むことは間違いない。今年第10戦フランスGPを終えて7人目のウィナーが誕生した。中上は「マルクがいない分、俺が俺がという状態。本当にすごいシーズンになっているが、バイクのフィーリングもすごくいいし、とても楽しい。今度こそです」と自信を漲らせる。

ライダーというのは不思議なもので、そうした一つ一つの自信の積み重ねが速さにつながる。自然とチームの士気も高まっていく。もちろん最大の敵でもある新型コロナウイルスにも気をつかう。感染リスクを避けるために外出を控えるなど、生活スタイルも変えた。

シーズンは残り5戦。これからの中上の戦いに注目したい。初表彰台を獲得すれば、今度、チャンピオン争いが現実味を増すことになるからだ。



中上貴品がなぜ今、MotoGPでここまで活躍ができてきているのだろう。世界中のチャンピオンが集まるグランプリの最高峰で、常にトップ10を走るところに、今、彼はいる。GPmonoで全日本を走った翌年には、GP125のチャンピオンを獲得、すぐにFIMのアカデミーに抜擢された。貴品を天才と呼ぶ人も多くいる。当時よりシステムが多少整っている今と比較しても、貴品は稀有な存在として世界へ羽ばたいていった。ここで、天才、中上貴品はどうやって生まれたのかを探るために、4歳からマンツーマンで貴品と戦ってきた、母、中上由比子さんに話を伺った。由比子さんは今でも貴品のマネージメントの一部を担い、活躍を支えている。

貴品の初バイクは4歳のポケバイ。5歳で初レース、初優勝は6歳のとき。

「主人も私も、男の子が生まれたらF1ドライバーさせようと思っていました。千葉北サーキットが家の近くにあると聞いて、軽い気持ちで行ってみました。衝撃的でした。あんな小さい子供たちが、あんなすごいスピードで走っている。サーキットには体験走行があつて、せっかくなのだからと、「乗ってみる。」と聞くと、乗ってみたって。でも千葉北の社長が自転車に乗れないとだめと言うので、その日は乗れず。まずは自転車の練習でしたが、すぐに乗れました。翌週に再び千葉北へ行ってポケバイの体験走行。ところが全くセンスがなくて、両足をバタバタさせているだけで、これはだめかなと思いました」

息子をF1ドライバーにしたい中上家は、4歳の誕生日にポケバイをプレゼントした。

知り合いから5万円で購入した中古だった。両足バタバタから半年後、レイトンハウスカ

ラーを施したマイマシンで千葉北を走行、しばらくして5歳の夏に初レース。

「ぶつちぎりのビリでした。でも楽しかった

つて、とてもいい顔をしてました。その日は本人も家族みんなほっこりした気持ちになりました。でも、次のレースはそうはいか

00が国内最高峰クラスとなった。250や125の2ストロークマシンもそう遠くない時期に、4ストローク化されることが決まっていた。そんな時代に、12歳の貴品はミニバイクからロードレースにステップアップした。スポーツランドSUGOで見た12歳の貴品はGPmonoに乗り、初めて全日本の舞台に立っていた。その年、地方選手権を戦っていた貴品に、GPmonoを盛り上げたMFJとホンダが白羽の矢を立てた。もちろんぶつちぎりで優勝し、その年、3戦行なわれた全日本併催のGPmonoで全戦全勝。初代のチャンピオンとなった。

*

GPの990ccに替わり、国内はJSB10

つこと。こう書くと、当たり前のように思われるかもしれないが、生まれてすぐ、バイクを速く走らせることができる子供はいない。天才と呼ばれるライダーは生まれてすぐではなく、バイクに乗り始めてトレーニングをしてからその後、頭角を現してから天才と呼ばれる存在になるのは明らかだ。

中上貴品を初めて見たのは、今から十数年前、スポーツランドSUGOでの全日本選手権だった。このころロードレース界が大きく変わり始めていた。それまでレーシングマシンの主流は2ストロークエンジンの車両だったが、この3年前に最高峰クラスがMotoGPの990ccに替わり、国内はJSB10

これまで、数多くのライダーと接してきた。その中のごく一部が世界への道を見出し、駆け上がっていった。世界のトップレベルで活躍したライダーに共通点はあるのだろうか。それが分かれば、これから世界で戦えるライダーを多く輩出することができる。ずっと以前からトップライダーたちにその生い立ちを、ゴシップ紙の記者のように聞いている。また、チャンスがあればライダーの両親にも話を聞いて、どんな幼少期だったかを探っている。

世界レベルまで上がっていったライダーには二つの共通点がある。一つはだれよりも多くの練習をこなしてきたこと。もう一つは、負けず嫌い

長年取材してきた『天才ライダーの作り方』中上貴品はどうやって作られたのか

ないでしょと本人と話をして、そこから毎日練習でした。家のそばの空き地で8の字の練習。ほぼ毎晩でした。少し走れるようになってからは、千葉北へ行って30分だけでもコース走行をさせました。家から30分から40分

千葉北は夜8時までのナイト練習があったんです。物心が付いたときには毎日練習していたかもしれない。でも、一度も練習したくないと言ったことはないんです。8の字も千葉北も。千葉北の人に最近、あのころほん

とによく練習していたね、と言われました」ただこのころ、中上親子の間で将来レーシングライダーになるとの話はなかった。ただただ負けたくないという母の思いと、それ

に「節目節目で本人に確認してはいたんです。練習もレースに出ることも、ポケバイからミニバイクへ、やるかやらないか、どうしたい?と聞いていました。実は小学校1年生のときにカートに乗せたんです。かなり速かったんですよ。そのときもどっちがいい?と本人に確認しました。親はカートに乗って、F1

ドライバーにしたかったの。でもタカは「カートは怖い、バイクがいい」と言っていた。それからは、自動車関連会社のエンジニアをする父がバイクの整備を、練習とレースは

由比子さんが送り迎えの日々が続く。毎週水

曜日は学校に迎えに行つて秋ヶ瀬に。学校にも理解を求め、早退や午後からの通学が許された。本人も由比子さん以上の負けず嫌い。ポケバイレースで2位になったとき、悔しくて表彰台にありがたくなないと、車にこもった。「このときは怒りました。2位になったのはだれのおかげ? 3位の人も10位の人もいて

の2位なのよ! 表彰式には必ず出なさい」と天才として生まれてきた人はいない。だけれども多くのトレーニングと、だれよりも強いメンタリティーを築いてきた成長期があつての結果。最後に由比子さんはこう語った。「親の中には理想があります。自分の子供にはこうなって欲しいという理想があるんです。

それを24時間、365日考えていました。そこだけは自信があります。ただ本人はもう子供ではありません。その先、自分を作り上げるのは本人の仕事です。親が何かできるのは17歳か18歳まで。とは言っても、最初にやらせたのは親。4歳の子供が自分からやりたいとは、本当の意味では言わない。やらせた責任は親にあると思っています。だから今でもいつも伝えるべきことをメモして、タイムリ

ングを見計らって、本人に伝えています。身内だから聞いてくれることもあると思うから」

世界のトップで戦うライダーは常に孤独だ。それを支えるのは家族と、一部の理解者だけ

なのかもしれない。

かつては悔しくて2位表彰台に上がりたくないと言った少年は今年28歳になった

かつては悔しくて2位表彰台に上がりたくないと言った少年は今年28歳になった